

夏作飼料作物の雑草防除について

八木俊一・原田角郎・中村大四郎

YATUKI, S., HARADA, K. and NAKAMURA, D.
Weed Control in Summer Forage Crops

夏作飼料作物栽培における生育初期の雑草対策は極めて重要であるので1962~1965年の間除草剤による防除試験を実施したがその成績の一部を報告する。

1. 試験方法

(1)播種直後散布試験：1964年5月22日播のソルゴー、テオシント、カウピーについてA-1114、デュボン-326、トリフラン、D、CMU、FW-925、ダイミッド、PCP、CATを夫々別表の通りの組合せと散布量によつて試験を実施した。

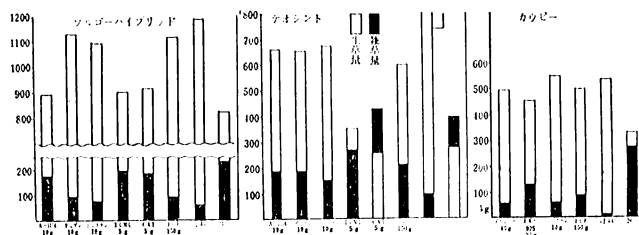
(2)生育期散布試験：1965年6月24日播のニュールソゴーについてD、CMU 5g(成分量g/a) A-1114 12.5g G-34162 12.5g アフアロン10g CAT 7.5g DCPA 25g 30gを2L期の生育期散布を行った。

2. 試験結果

(1) 播種後散布

除草効果と薬害：CATを除き各剤共に雑草の発芽抑制効果がけん著に見られ、メヒシバ、オヒシバ、ヒエ等の禾本科雑草に対してはトリフラン>デュボン-326>PCP>A-1114>D、CMU>CAT イヌビユ、ハコベ等の広葉雑草ではPCP>デュボン-326>A-1114トリフラン>D、CMU>CAT また(カウピー)につい

第1図 生草収量及び雑草量比(%)



てはダイミッド>トリフラン>PCP>FW-925の順に除草効果があつた。薬害の程度はトリフランでわずかに伸長抑制作用が見られた外は、A-1114デュボン-326 D、CMU 等で一時的に葉色の退色があつたが間もなく回復し問題とならない程度であつた。

生草収量と残存雑草量：各作物について夫々2回刈を行った調査結果は第1図の通りで、初期生育の旺盛なトウモロコシ、ソルゴー等では初期の雑草抑圧によつて充分な除草効果が期待出来るが、これに対し生育の緩慢なテオシントでは初期の雑草抑制だけでは不充分で併せて薬効の持続性が必要である事を明示している。なお、これらの禾本科作物に対してはデュボン-326トリフランが従来普及しているPCP程度又はそれを上廻る除草効果を認め、カウピーに対してはトリフラ

ンダイミッドが効果が高かつた。

(2) 生育期散布

DCPA, D, CMU. アフアロン G-34162 A-1114は
いづれも散布後3～7日の間に大株のメヒシバ、オヒシバ、カヤツリグサを除きほとんどの雑草を枯死させたが一方薬害によるニューソルゴーの枯死株も多く上記の内DCPAの枯死率50～80% その他の薬剤で10～20%程度となり残存株も全般的に下葉が流れ相当長期に亘る生育停滞を来し後日回復に向つたが生育期散布を試みたニューソルゴーで接触薬害が大きいのが注目された。従つて根吸収のみによる除草剤について検討されるべきであろう。

3. 結 び

以上の結果から夏作禾本科飼料作物に対してはトリフラン 10gデュポン-326 10gが最も有望で従来普及しているPCP150g以上の効果が期待され又荳科作物に対してはトリフラン10gダイミッド40gが有望と思はれる、但しトリフランは雑草々種に禾本科が多い場合により有効で広葉雑草の多い圃場ではデュポン-326PCPがトリフランに優る様である。なお青刈飼料作物に対する除草剤の利用は生育抑制が直接生産の低下に結びつくこと、又飼料作物には多回刈作物が多いこと、など実取作物の場合と異つた幾多の問題点があるので、生育期散布試験も含めて更に追試の必要を痛感する。